いま日本社会に求められる宗教リテラシーについて

川島　堅二
東北学院大学文学部総合人文学科教授

はじめに

2022年7月安倍晋三元首相が演説中に銃撃され死亡した事件で、容疑者が世界平和統一家庭連合（以下、旧統一教会）に対し恨む気持ちがあったと供述したことから、旧統一教会の過度な献金問題が改めて明らかにされ、2023年10月、文部科学省はついに旧統一教会への解散命令を東京地裁に請求するに至った。

この間、メディアなどで注目されるようになった言葉に宗教リテラシーがある。容疑者の母親が家庭崩壊するまでに過度な献金を要求する宗教団体に入ってしまったのはなぜか。しかもこのような社会問題化してきた宗教団体は旧統一教会だけにとどまらない。過去数十年だけを見てもオウム真理教や摂理、エホバの証人など、さまざまな新宗教に、人々が入信し被害を受けてきた。そうした宗教がらみの事件が起こるたびに警鐘が鳴らされるにもかかわらず、繰り返されるのは日本社会に宗教に対処するリテラシーが不足しているのではないか。そうした問題意識である[1]。

宗教リテラシーの重要性にいち早く注目してきたキリスト教の業界紙が『キリスト新聞』である。同紙は2017年に連載企画「宗教リテラシー向上委員会」をスタートさせた。ユダヤ教、キリスト教、仏教、イスラム教に信者や指導者（教職）としてコミットしている立場、あるいは研究者として宗教の外からこれを観察研究している立場など、多様な側面から「宗教との適切な付き合い方」について提言がなされてきた。こうした特定の宗教メディアが他宗教の信者や教職に連載執筆を依頼するのは異例であり、画期的な出来事であった。宗教との向き合い方の模索には個別宗教の垣根を越えなければならないのである[2]。

かわしま　けんじ
東京大学大学院人文社会系科博士課程満期退学。博士（文学）。専門は、宗教学・宗教思想。東北学院大学大学院文学研究科・文学部総合人文学科教授
著書に『徹底討論！問われる宗教とカルト』（共著、NHK新書、2023年）、『わたしが「カルト」に？ ゆがんだ支配はすぐそばに』（監修、日本キリスト教団出版局、2023年）など。

宗教リテラシーとは何か

「リテラシー」は日本語では一語に置き換えられない多義的な言葉である。辞書には「読み書きの能力。識字。転じて、ある分野に関する知識・能力」とある[3]。ここからすると宗教リテラシーとは「宗教に関する知識・能力」ということになるが、これでは何の説明にもなっていない。今日的な状況を加味するならば、「宗教と適切に関わるために必要な知識と能力」とでも言えるだろうか。

「適切に関わる」ということで特に「倫理的な適切

さ」が意味されている。宗教の濫用や誤用による人権侵害を予防する、あるいは逆に根拠のない先入観や偏見で信者を差別し傷つけることを予防するための倫理的な能力とも言えるだろう。

ただ宗教そのものが多様であるのに加え、宗教への関わり方も多様なので、一口に宗教リテラシーと言ってもその内容は一色ではない。私は宗教リテラシーには自覚的に区別されるべき三つの種類があると考えている。すなわち、第一に、信者であるかどうかにかかわらず、すべての人に求められる宗教についてのリテラシーであり、宗教についての適切な情報提供を目的とする。そういう意味でインフォーマティヴな性格のもの。第二に、宗教に積極的にコミットするときに求められるリテラシー。すなわち信者、特に宗教指導者に求められるリテラシー。そして第三に宗教を研究や調査の対象とする研究者に求められるリテラシーである。

宗教リテラシー・インフォーマティヴレベル

このレベルでのリテラシーの必要が日本社会において強く自覚されるようになったのは1980年代に韓国から入ってきたキリスト教系の新宗教「摂理」（現在はキリスト教福音宣教会と改称）の教祖による性犯罪が全国紙で報道された2007年7月以降である。それ以前にも日本において社会問題化した宗教団体は、旧統一教会やオウム真理教など複数存在したが、それらの団体が曲がりなりにも宗教法人格を有し、団体名を掲げた自前の施設を拠点として活動していたのに対し、「摂理」は日本においては法人格を有さず、大学の文化サークルやスポーツサークルを拠点として、宗教であることを完全に隠して活動していた。勧誘された多くの大学生は背後に宗教団体があること、しかもその教祖は1999年には韓国において性犯罪者として告発されているということなど、全く知らずにかかわりを深め、気づいた時には心情的に後戻り困難な状況に陥ってしまっているということが明らかになったのである。

たとえば首都圏の私立大学に在籍していたAさん（女性）が最初にこの団体に勧誘されたのは大学図書館だった。「近所の小学校の体育館を借りてバレーボールをしているサークルで、東大生や東工大生も来ているインカレサークルです」と紹介された。何かスポーツをしたいと考えていたAさんはその誘いに興味を抱いた。会場も小学校の体育館ということでとくに警戒心を抱くことなく行ってみることにした。宗教の臭いはまったくなく、何度か参加するうちに今度はこのサークルが共催するという芸術祭に誘われた。行ってみて驚いた。高校生の頃からファンであった有名な漫画家のプロデュースで、実際にその漫画家が壇上で挨拶していたからだ。「私はとてもラッキーな出会いをしたのかも」。そう思って、いよいよ積極的に関わりを深めたという。しばらくして「実は私たちは外国にいる偉い先生の教え（聖書）を学んでいる。よかったら一緒に学ばないか」と言われ、この団体がその本性を現した時には、もう後戻りする気持ちにはなれなかったという[4]。

このような正体を隠した勧誘を「摂理」が盛んに行っていたのは20年近く前であり、その後、教祖の逮捕、強姦致傷罪10年の実刑判決確定で服役などの経緯、また大学が学外者による勧誘行為に対策を取るようになり現在は偽装サークルによる勧誘は以前ほど活発ではない。しかし、たとえば旧統一教会の下部組織でかつては「原理研究会」という名称で、統一教会の教典である『原理講論』を研究するサークルであることを明示していた団体が、現在は「CARP」（カープ）というカジュアルな名称で活動している[5]。筆者の地元である東北大CARPホームページにはサークルの活動について

> 「夢のある豊かな未来を目指し、人を心から想う喜びを広げよう！をVISIONとして活動しています」
> 「SDGsを中心に社会や世界が抱える課題について大学生として私たちにできることがないか日々研究し、解決策を模索しています。」[6]

とあるだけで、旧統一教会とのつながりはもとより、宗教団体の教典を研究するというこのサークル

本来の目的はまったく明示されていない。実際、国立大学の名を冠したサークルなら安心と騙されて関わってしまったという大学生の事例が最近も報告されている。こうした現状に対して、宗教団体側に適切な情報提示をするように求めるとともに、勧誘のターゲットになる大学生に対して適切な情報提供を行う必要がある。これがインフォーマティヴレベルで求められる宗教リテラシーである。

このレベルでの宗教リテラシーが必要とされるのは大学生だけではない。近年の日本には留学生や仕事で来るイスラム教徒も多数いる。筆者はイスラム教についての知識を求めて一時期、日本ムスリム協会の学習会に定例参加していたのだが、ある日、協会の理事から「キリスト教徒の立場から見たイスラム教」という題での講演を依頼された。聴衆はみなイスラム教徒だったが、学習会や礼拝にも参加を重ね、親しみを感じていた人が大部分だったので、喜んで承諾した。

聖書とコーランの内容の比較から入るのが分かりやすいだろうと思い、片手に新共同訳の旧・新約聖書、もう片手に日本人ムスリム協会訳のコーランを持ちながら、両者の内容の共通点と相違点について語った。

聴衆は30人ほどだったが、半ばくらいまではうなずきながら聞いてくれていた。ところがある時点で急に雰囲気が固くなるのを感じ、何かまずいことを言ってしまっただろうかと焦ったが、心当たりのないままとにかく与えられた時間を語り終えた。質疑応答の後、司会を務めた協会の理事から言われたことが今も忘れられない。

「川島さんはムスリムではないので無意識にされたことと思うが、講演中に聖書とコーランを示された後に、コーランの上に聖書を置いた。神聖なコーランの上には決して物を置いてはならないと私たちは考えているので、この点は今後、ご注意ください」

講演の途中で雰囲気が急に固くなった理由がようやくわかった。確かに私は両手で聖書とコーランを示した後、両書を横にしてコーランを下に、その上に聖書を置いて話していたのだった。聖書を下にしてその上にコーランを置けばよかったのだが、後悔先に立たずである。

この出来事を機に、同じ一神教でもキリスト教とイスラム教では正典に対する理解、とりわけそれがどのような意味で「神の言葉」であるかについてはまったく考えが違うことを再認識した。

同じ頃、次のようなエピソードも聞いた。日本のある雑貨店でアラビア語コーランの言葉が記されているタペストリーを、足ふきのように使っていたのに心を痛めたムスリムが「言い値で買い取るから、そのタペストリーを譲ってほしい」と交渉したが「これは売り物ではない」という理由で聞いてもらえなかったという。

日本は複数宗教が混在している社会である。仏教や神社神道に関するリテラシーは子供の頃から初詣や七五三、葬儀などを通して自然と身に着けることができるが、厳格な一神教については自覚的に学ばなければならない。

宗教リテラシー・コミットメントレベル

信者として、あるいは聖職者として宗教に積極的にコミットする人に求められるリテラシー、それを一言でいうならば宗教多元主義という考え方、姿勢である。

特定の宗教を信じる者が、他の宗教に対してどのような態度をとるかという問題に関して、取り得る立場の理念型として排他主義、包括主義、多元主義の3つの立場がある[7]。排他主義とは自分の宗教のみを真理とする立場。包括主義は他宗教も真理の一部を含むが完全な真理は自分の宗教のみが保持すると考える。これらに対して多元主義は諸宗教（とりわけ仏教、ヒンズー教、キリスト教、イスラム教のような長い歴史を有する伝統宗教）はいずれも真理を含み優劣はつけられないとする[8]。

「わたしは宗教多元主義者ではない」という宗教（指導）者は多いが、その場合、排他主義者か包括主義者のどちらかということになる。今日、排他主義を選択する人は破壊的カルト信者か原理主義者で、少数派である。大多数が包括主義の立場をとることになる。しかし、私見では包括主義もソフトな排

他主義に他ならない。

包括主義の立場をとる宗教者は、常に包括する側に立ってものを考えている。しかし、一度でも包括される側に立たされてみると、この考え方がソフトな排他主義であることを実感することができる。紙幅の関係上詳細は省くが、筆者は「最初の人間アダムはムスリムであった」とするイスラム教や、自前の施設（境内）で世界のすべての宗教の神々を礼拝できると説く某仏教系の新宗教のような究極的ともいえる包括主義と向き合うことで、自分が包括される側になる経験を通してこのことを実感させられた。

宗教多元主義の立場をとることで、可能になるのは、宗教は必ずしも一生ものというわけではなく、いつでも辞められるし、また再開できる。一度に複数の宗教にコミットすることも可能という心性である[9]。排他主義の立場をとるカルト宗教が脱会を認めないのはいうまでもないが、伝統宗教でもいったん入信（洗礼を受けるなど）したらそれを取り消すことは理論上（神学的・教学的に）できない場合が多い[10]。したがって宗教リテラシーとしての宗教多元主義はカルト宗教のみならず、伝統宗教に対してもラディカルな挑戦となる。

この宗教多元主義に通じる思想を組織神学者として最初に公にしたのは、近代神学の祖フリードリヒ・シュライアマハーだ。彼は『宗教論』（1799年）において、宗教の本質を「無限者（神）を感じ味わうこと」と規定し[11]、イエス・キリストによる啓示も、神についての数多くの「味わい」の一つであるという今日の多元主義に通じる思想を展開した。19世紀ドイツのプロテスタント教会の牧師職にあったシュライアマハーは、当時、そのような主張を匿名の著書によってしかすることができなかった。

筆者は20代でキリスト教の聖職者（牧師）として働き始めた頃は包括主義の立場であったが、その後、とくに1995年のオウム真理教による地下鉄サリン事件を契機に「カルト宗教」といわれる社会問題化している団体の現役信者や脱会者と向き合う中で多元主義支持の立場に変えられてきた。現在は宗教の未来はここにしかないという確信になりつつある。

宗教リテラシー・調査・研究レベル

最後に宗教を調査・研究の対象としている宗教学者に今日求められるリテラシーについてである。

日本の宗教学の基礎を築いた姉崎正治は、1930年5月、東京帝国大学文学部宗教学講座創設25周年記念会における講演において、宗教研究者を「気象台」になぞらえ、内外の宗教研究および活きた宗教状況の観測者であることを心がけねばならないと述べている[12]。気象台の存在理由は、人の生活に甚大な被害をもたらす悪天候を大気の観測によって事前に予測し警報を発することであろう。前世紀から今日に至るまで宗教団体が直接、あるいは間接の原因となっている事件が全世界的に数多く起こっている。こうした宗教状況の観測者「気象台」として、事前に警報を発するような宗教学こそ、宗教研究者に今日求められるリテラシーであると考える。

筆者はかつて姉崎正治が構想した宗教学体系の中にありながら、その後の宗教学に継承されることのなかった「宗教病理学」を「予防宗教学」という名称で現代によみがえらせるという提案をした[13]。その名称はともかくとして「気象台」としての宗教学、すなわち宗教の社会病理現象を対象化する学問としての「宗教病理学」の再構築が喫緊の課題であることは間違いないであろう[14]。

おわりに

以上、筆者が現時点で構想している宗教リテラシーについての素描である。とくに「宗教多元主義」と「宗教病理学」は、宗教に対して倫理的に正しく関わろうとするものにとっては欠かすことのできない、車の両輪のようなものだと考えている。前者に立つことで、すべての宗教を公平に認めながら、病的な證候は後者によってしっかりと批判的に判別し、必要であれば社会に対して警告を発していくことが、宗教者、とりわけ宗教指導者や宗教学者には求められるのである。■

《注》

1 安倍元首相銃撃殺害事件を受けて、NHKの宗教番組「こころの時代」が緊急企画として放映した「徹底討論！問われる宗教と〝カルト〟」は視聴者から大きな反響があり、とりわけ宗教リテラシーについてもっと具体的に知りたいという声が多かったという。この討論の結論で、宗教社会学者の櫻井義秀氏が「宗教リテラシーがある程度普及していけば、カルト問題は縮小していく」と述べ、また神学者の小原克博氏も「宗教リテラシーをひろげていくことによって、カルト問題が解決する可能性がある」と述べているから、そうした反響は当然であろう。(島薗進他 2023:147,149)

2 筆者も執筆している連載「宗教リテラシー向上委員会」は、以下のキリスト新聞のホームページから全文閲覧可能である。http://www.kirishin.com/

3 『広辞苑』第六版

4 (川島 2010:234-235)

5 CARP は Collegiate Association for the Research of Principles の頭文字である。

6 東北大 CARP ホームページ https://peraichi.com/landing_pages/view/touhokucarp/ 2023 年 11 月 15 日閲覧

7 (岸根敏幸 2008:21),(Race1983: 10-105)

8 宗教多元主義については (Hick1980) 参照

9 複数宗教経験についての先行研究としては濱田陽（2005）がある。また、こうした心性を社会学者のウルリッヒ・ベックは「第二の近代のコスモポリタン的宗教性」と呼び「自分自身の宗教と文化を他者が属する他者の宗教と文化の視点から見る能力」と規定する。(ベック 2011:202) 参照。

10 イスラム法では「棄教」は「死刑」にあたる。イスラム教は他宗教に対して寛容で、信仰の自由を保障しているが『イスラーム辞典』（岩波書店）の「棄教」の項目にも明記されているように、その寛容さはイスラム教の外の人たちに対するもので、イスラム共同体の成員（信者）に対しては不寛容な立場を採っている。他宗教への改宗の道は原理的に閉ざされているのである。

11 原文は ”Religion ist Sinn und Geschmak fürs Unendliche.”(Schleiermacher1799:53)

12 磯前順一・深澤英隆（2002:98）

13 (川島 2009) 参照

14 姉崎正治の「宗教病理学」の内容の現代的意義については『上智大学キリスト教文化研究所紀要』第 41 号（2024 年）に掲載予定。

《参考文献》

磯前順一・深澤英隆（編）(2002)『近代日本における知識人と宗教－姉崎正治の軌跡』東京堂出版

島薗進他（2023）『徹底討論！問われる宗教とカルト』NHK 出版

川島堅二（2009）「宗教学の責任と可能性」『神学とキリスト教学－その今日的可能性を問う』キリスト新聞社 p.33-62

川島堅二（2010）「大学におけるカルト勧誘の実態」『宗教と現代がわかる本』2010、p.234-237

川島堅二（2012）「全国カルト対策大学ネットワークについて」『大学のカルト対策』北海道大学出版会 p.33-52

岸根敏幸 (2008)「宗教多元主義の位相」、間瀬啓允（編）『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社 p.20-35

濱田陽 (2005)『共存の哲学　複数宗教からの思考形式』弘文堂

Hick,John (1980), *God Has Many Names,* The Westminster Press, Philadelphea

ベック , ウルリッヒ（2011）『〈私〉だけの神　平和と暴力の狭間にある宗教』岩波書店

Race, Alan(1983), *Christians and Religious Pluralism,* SCM Press Ltd

Schleiermacher,Friidrich(1799),*Über die Religion,* Berlin Unger